

Title	浄土宗談議書における説話覚書(一)
Author(s)	近本, 謙介
Citation	詞林. 1990, 8, p. 48-59
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67293
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

浄土宗談義書における説話覚書(一)

近本 謙介

はじめに

面から進められつつあるのに比して、浄土宗系の談義書の研究華経直談鈔』・『阿弥陀経見聞私』など個人の著述の横軸の両、「轍慶抄』・『法華経直談鈔』など法華経直談系談義書という『轍慶抄』・『法華経直談鈔』など法華経直談系談義書という直談私類聚抄』・『一乗拾玉集』・『法華経鷲林拾葉鈔』・天台宗系の談義書(談義本)における説話の研究が、『法花天台宗系の談義書(談義本)における説話の研究が、『法花

伸幸氏の一連の御研究を除いては、未だ纏った研究はなされて中幸氏の一連の御研究を除いては、未だ纏った研究は、いま仮に来的に考慮する必要性を念頭に置きながらであれば、いま仮に来的に考慮する必要性を念頭に置きながらであれば、いま仮に決えることもできようか。了誉聖冏・酉誉聖聡への流れに、浄土宗談義書における縦軸は了誉聖冏・酉誉聖聡への流れに、浄土宗談義書における縦軸は了誉聖冏から酉誉聖聡への流れに、浄土宗鎮西派内部の問題や西山派との相違という問題を、将)

いないのが現状である。

して覚書としておきたいと思う。における説話」を考えるためのいくつかの基礎的な問題を整理における説話」を考えるためのいくつかの基礎的な問題を整理派の第八祖酉誉聖聡の著述に引かれる説話について、「談義書派と まず鎮西

二 西誉聖聡とその著述

『小経直談要註記』については、岩波書店『古典文学大辞典』羅疏』によって知ることができる。『大経直談要註記』及び型寿経』の変相図である當麻曼陀羅に注釈を施した『當麻曼陀理注記』・『観経直談要註記』と浄土三部経に関する三部作を著註記』・『観経直談要註記』は今に伝わらないが浄土宗の談義書に浄土経典に関するものが多いのは自然の成浄土宗の談義書に浄土経典に関するものが多いのは自然の成

の「浄土三部経」の項に若干の言及がある。

四巻の著述は、『国書総目録』を検するに五十余を数え、それら全てが説話を引きながら説かれるものではないが、ここにれら全てが説話を引きながら説かれるものではないが、ここにおもむき、ついで当麻寺に詣でて七月十五日まで滞在し本曼陀羅並びに建保三年新写の曼陀羅に礼拝回願し、さらに同年十月、元興寺極楽坊に至って智光曼陀羅を拝し、また超昇寺に清海曼陀羅を拝見したことにより」著わした由の引用がなされるが、ここにおもむき、ついで当麻寺に詣でて七月十五日まで滞在し本曼陀羅並びに建保三年新写の曼陀羅に礼拝回願し、さらに同年十月、元興寺極楽坊に至って智光曼陀羅を拝し、また超昇寺に清海曼陀羅を拝見したことにより」著わした由の引用がなされるが、ここに和いまがは、『国書総目録』を検するに五十余を数え、そ四誉の著述は、『国書総目録』を検するに五十余を数え、そ四誉の著述は、『国書総目録』を検するに五十余を数え、そ四巻の書がは、『国書総目録』を検するに五十余を数え、そ四巻の書がは、『国書総目録』を検するに五十余を数え、その解説には、『日本記録』を検するに五十余を数え、その解説には、『日本記録』を検するに五十余を数え、その解説には、『日本記録』を検するに五十余を数え、その解説によります。

見出せないため、『浄土宗全書』の本文を用いておくしかある

『富麻曼陀羅鈔』(題簽)と、必ずしも一定していない。(題簽)、東洋大学本が『曼陀羅鈔』(直書)、龍谷大学本が正大学本が『當麻曼陀羅鈔』(題簽)及び『曼陀羅酉師抄』正大学本が『當麻曼陀羅鏡』とするものの、外題は、大の内題は諸本とも『當麻曼陀羅鏡』とするものの、外題は、大の内題は諸本とも『當麻曼陀羅鏡』とし、解題書名に関して『浄土宗全書』は『當麻曼陀羅鏡』とし、解題

一]刊。)が「當麻曼陀羅鈔」とする。 妙四十八巻」(注3)、『浄宗書籍目録』(文久元年[一八六鈔四十八巻」(注3)、『浄宗書籍目録』(文久元年[一八六尾増補。寛保年間[一七四一~一七四三]成立。)が「曼陀羅・のち目録類では、『浄土正依経論書籍目録』(成立未詳)の「曼陀羅・)としており、書籍曼陀羅鈔」、『東国高僧伝』が「曼陀羅抄」としており、書籍

伝記類でその著述にふれた中では、『本朝高僧伝』が「當麻

ているから、酉誉自身はこれを書名としていたか。 で、酉誉が「私云」とする部分に「曼陀羅・疏・・・」とみえで、酉誉の弟子の了暁が書き留めた『鎮西宗要本末聞書』の中し、酉誉の弟子の了暁が書き留めた『鎮西宗要本末聞書』の中書の「此疏四十八巻者・・・」に拠ったのではあるまいか。但書の「此疏四十八巻者・・・」に拠ったのではあるまいか。但言麻曼陀羅・・・」に扱ったのは、『曼陀羅・シ』とみえているから、酉誉自身はこれを書名としていたか。

曼陀羅,一中"先,密教,曼陀羅者昨日細釋畢今日、釋,顕教曼方今被,讃嘆稱揚,安楽浄土九品曼陀羅聖容次"舉",諸餘,

(栄心 一五四六以前)からは一世紀ほど遡り、成立の上限が三六)成立の『當麻曼陀羅疏』は、例えば『法華経直談鈔』三六)成立の『當麻曼陀羅疏』について、いくつか基礎的な事項を以上、『當麻曼陀羅疏』について、いくつか基礎的な事項を以上、『當麻曼陀羅疏』について、いくつか基礎的な事項を以上、『當麻曼陀羅疏』について、いくつか基礎的な事項をと言頭にもみえるから、一日に一巻の割合で説き記していっ巻三冒頭にもみえるから、一日に一巻の割合で説き記していっとあり、傍線部のように「昨日」、「今日」として始めるのはとあり、傍線部のように「昨日」、「今日」として始めるのは

三 出典注記説話とその叙述

る『三国伝記』とはほぼ同時期の資料ということになる。応永十四年(一四〇七)、下限が文安三年(一四四六)とされ

における説話」としての性格を、いくつかの視点から考察してるそれとは異なる性格もみられるのではあるまいか。「談義書談義書という「場」における説話には、例えば説話集におけ

話において、最も数多く引かれるのは、『三宝感応要略録』で有益であると思われるが、『當麻曼陀羅疏』所引の出典注記説引かれる説話がいかなる素性のものかを知るのに出典注記は

いくことにする。

次のようになる(注4)。記』における『要略録』説話の所在とともに合わせて記すと、曼陀羅疏』と同じく『要略録』に依拠した説話の多い『三国伝ある(以下、『要略録』とする。)。その引用状況を、『當麻ある(以下、『要略録』とする。)。その引用状況を、『當麻

◆ 二―2 上11「鶏頭摩寺五通菩薩請阿弥陀像図写感応」◎『當麻曼陀羅疏』と『三宝感応要略録』の共通話

十 -- 2 上2「影勝大王釈迦画像感応」(書名・人名)

巻

→『三国伝記』 二―4上1「優填王波斯匿王釈迦金木像感応」

上15「釈道如為救三途衆生造阿弥陀像感応」

巻 十

5

巻十

| 3

巻二十二―1(下21「釈道秦念観音菩薩増壽命感応」 →『三国伝記』(三―2)

→ 『三国伝記』 八**一**5

巻二十二―2 下23「憶隆羅国造十一面観音像免疾疫難感応

→ 『三国伝記』 七—23

巻二十二―3 下3「雍州鄠縣李趙待為亡父造大勢至像感応

→『三国伝記』 三―1上9「信婦言称阿弥陀佛名感応」 →『三国伝記』 十―29

巻三十

| 2

→『三国伝記』十二―8巻三十二―1 上20「十念往生感応」

- 50 -

巻三十六―6 下6「五台縣張元通造文殊形像感応」

→ 『三国伝記』 六—2

巻三十六―7 下9「高陲安義蒙普賢救療感応」

→ 『三国伝記』十一—2

下39「陀羅尼自在王菩薩於地獄寶縁上説法感

→ 『三国伝記』十一—23

巻三十八―3 巻三十八一2 下 12 下41「釈道詮禅師造龍樹像生浄土感応」 「済陽江夷造弥勒像感応」

巻四十一―6 中 21 「道珍禅師誦阿弥陀経生浄土感応」

「阿弥陀佛化作鸚鵡引接安息国感応」 **→『三国伝記』 七―21**

巻四十六―2 上 15 (要約)

巻四十八―5

上 15

巻四十一―9

上 17

仁三年 一一一〇)に影響が認められて以来、東大寺の学僧 ことが窺われる(注5)。また、『法華百座法談聞書抄』(天 ることからも、説話集編纂にあたっての第一級の資料であった も影響を与え、『三国伝記』にも八十条を越える説話が取られ が項目を立てたものに、便宜上従ったものである。 宋の非濁の撰になる『要略録』は、古くは『今昔物語集』に 『當麻曼陀羅疏』の巻の下にあげた数字は、『浄土宗全書』

> 実態に関しては、池上洵一氏の説かれる如くである(注6)。 期を通じて、宗派、地域を越えて『要略録』が利用されていた

く小林忠雄氏に論があり(注7)、いまそれを要約すると、 『三国伝記』における『要略録』の引用態度については、早

一、補説、修飾若しくは美辞麗句を挿入した跡が見られる。 一、やや複雑な記述になると、多少の省略、削除は加えら れるのが常である。

三、『三宝感応要略録』との比照によって『三国伝記』の 校訂に資し得る例があり、また、それは『三宝感応要 略録』の側に於いても認められる。

なり思い切った改変を行なっている。 となる。一、二にあるように、『三国伝記』の著者玄棟は、 『要略録』を資料として用いる際に書承を基としながらも、か

これだけ多くの『要略録』説話を引きながら、中巻からは巻四 見るに、まず第一に引用部分に偏りがあるといわねばなるまい。 ―6に一話しか取られていないのは明らかに偏りがあるが、 続いて、『當麻曼陀羅疏』における『要略録』の引用態度を

その理由は単純であろう。当麻曼陀羅という『観無量寿経』の

変相図に注釈を加えていく上で、経典に関する霊験説話を七二

これは、上巻の仏像に関する感応霊験譚に取材した七話のうち 験を語る中巻21話のみが取られたとみて誤らないと思われる。 は三条に過ぎず、この結果、それらから『阿弥陀経』読誦の霊 条集めた『要略録』中巻の中に、浄土経典の霊験を記したもの

慈尊院栄海(一三二四年成立の『真言伝』の著者。)と、鎌倉 住信(一二五七年成立の『私聚百因縁集』の著者。)、醍醐寺 宗性(一二九二寂)、安居院の聖覚(一二三五寂)、常陸の僧

追うこともできるようである。に同文的書承を基とするものが多いが、いくつか改変のあとをに同文的書承を基とするものが多いが、いくつか改変のあとをの漢字の用字まですべて一致しているものがあり、他も全体的引用の方法をみると、漢字一字の異同以外は、本文はもちろ

まず、単純なものをあげてみる。

『當麻曼陀羅疏』巻三十六―6

發、願造,文殊、像高,三尺,, 、 (注8) 三寶感應錄下(非獨撰三卷)云五臺縣、張元通、信心堅固, 8

第六五喜縣張元通造文殊形像感應(新錄)『三宝感応要略録』下6

の説話の独立性を指向するものに他ならない。但し、西誉の用定・場の設定の必要からの改変と考えられ、それは一話としてこれは題目に記される内容を説話に取り込んだもので、人物設張元通。信心貞固。發願造文殊像高三尺。(注9)

を記すことにする。 次に巻三十七―1をあげ番号を付して、『要略録』との異同

『當麻曼陀羅疏』巻三十七―1

検討する必要はあろう。

いた『要略録』が、版本と同じ体裁のものであったかはさらに

悲,一哀, ****放, 褚沙門、愚癡***招, **, 苦, 一或***立, 鑊, 自責4- (49]云云) 吾自見"聞"此事, 是故悲气泣》,"爱"衆 罪人、。今億,念、,昔、所犯、罪業,、「慚愧懺、質」,厭難悔過 縁/上" | 或"ア行サ、鐵/車/上" | 隨所"""而爲"説^、法"""彼/ "看》,世"唱了利"。養"一犯,"。破"佛/戒品,聖教"同宿", 地獄/中"一説法****給****彼/沙門答曰我是陀羅尼自在王菩 之輩;多、是沙門;於,鐵鑊/彖/上"一有"一/沙門一説法》 寶,乃,《惠生",。使者,。相副,遂,令,去,於。》,東方,次 ↓地獄,- ゚ー給ー哉否*ー゚ッ恵生答ー。曰雖、聞、其名,, 未ト、見、其 吾被、清、閻魔王宫"一王從、座而起,恭敬。禮拜》,一。曰阿師見 弟子。也專誦,大乗。經,,遂,一日一夜不,,動如?,入,禪 三寶感應録云唐〉眞寂寺〉沙門惠生,二云、、人、是、惠如禪師, 惑、世間,一如」。一是等、罪皆感,。"地獄」果。"報,一我以,"《慈 住"穢"伽藍,一無。",慚愧,心一虚,受,信施,一不淨説法"誑, 薩~。也於,此大鐵圍~中"一有,無量~沙門一~。堕,地獄"一貪, 第"見**三十二子城*」一一城、中皆(^^) 地獄"シ*受չ苦 立,聲悲泣*ケペ゚゚衆僧ア問曰由。何事゚゚ー 悲泣クマフォドッ患生答曰 (18) 教, 18化、罪人,18惠生即問。1云何人"**20御座*公於,

問所由 8ナシ 9ナシ 10語言 11ナシ 12ナシ 13ナー1ナシ 2ナシ 3ナシ 4流涙汗血 5ナシ 6乗 7

僧46聞,此事,一4,嘆+,48皆48改44,惡者蓋>多》(已上)

ナシ 42ナシ 43ナシ 34ナシ 35ナシ 36於 27著 28ナシ 29ナシ ナシ 21公 22ナシ シ 14ナシ 15勅使 23 ナシ 16 ナシ 44喜 45ナシ 37於 38ナシ 30ナシ 31斯 24ナシ 25ナシ 17 有 18 示 39 ナシ 46聞者 32 ナシ 1919利喜 47 難 33 ナシ 26ナシ 48

20

異 49ナシ

記』では「流シ汗"落"、涙"」としており、詞章は異なるが『要 略録』の該当部分を書き換えようとする意識には、同様のもの 7のように詳しく具体的になるのである。4の部分は『三国伝 て書き換えをし、さらに『要略録』本文にない5をそっくり補 の改変が加えられている。また4の例などは、『要略録』が 20のように語り手の名を補うことで話者をはっきりさせるなど とによって会話部分を和文化したり、二重傍線部8・12・14・ 文末をはっきりさせたり、11・22・23のように尊敬語を補うこ い、その結果『要略録』では「問所由」とだけあったものが、 「流涙汗血」とするのを、「流,血涙、出,血汗、」と意を以 基本的には書承しながらも、2や25のように「也」を補って

えられる。

こともできようが、『三国伝記』はこの部分を「一々、城・中・ 通じるにも関わらず、『當麻曼陀羅疏』では「有」がないため 「皆地獄"ジ゙」と補ったことが窺われる。単なる改変と考える 17は『要略録』のように「一一城中。皆有地獄。」で文意が が感じられる。

異同のある本文に両書が拠っている可能性もあるようである。 は見えないから、おそらく『當麻曼陀羅疏』が補ったものと考 え、文意も通じるのだが、『三国伝記』にはそれを訳した部分 また、26で『當麻曼陀羅疏』には『要略録』にない「堕」がみ るが、ここでは慶安三年刊本の本文を是とするべきであろう。 年刊本の誤りを訂正することができる箇所もあるように思われ 本であったと思われ」、実際『當麻曼陀羅疏』によって慶安三 の作品が利用した『要略録』はおおむね慶安三年刊本よりは善 述の説話文学諸作品の本文とを詳細に比較してみると、これら っているが、池上氏が述べるように(注11)、「その本文と前 が見出せないことから、室町期において、現在の版本とは若干 文意が明確ではない」が、『當麻曼陀羅疏』においても「有_ 皆地獄,受」苦。輩」と、後につなげる形で訳しており、池上洵 **一氏が指摘するように(注10)、「原典の「有」を欠くため、** 『要略録』本文は『大正新修大蔵経』所収の慶安三年刊本に拠

時に、両書の『要略録』書き換えの態度に共通したものがみら 宗僧が同じ説話資料を書き換える上で、共通した方法がみられ 摘する『三国伝記』における『要略録』の採録態度と大きくく ることは、宗派間の問題もさることながら、仏僧が営む説話集 い違ってはおらず、同時期の天台宗の僧と目される玄棟と浄土 談義書における説話利用の方法という点からも興味深い。同 巻三十七―1に見られる書き換えの態度は、小林忠雄氏が指

う現象に何らかの要因を考えることはできないであろうか。傾向は『要略録』を出典とする他の共通話にもあてはまるといれながらも、概して『三国伝記』に改変のあとが大きく、その

ていることは、その出典を明かすに値することであったと思わ 当時広く知られていたであろう、いわば由緒ある書物に記され 陀羅疏』においては、教説の証話としてその説話がおそらくは 変される契機を与えられるのではないだろうか。逆に『當麻曼 な出典としての意識・枠組が取り払われた時、説話は大きく改 あったのであり、『當麻曼陀羅疏』における『要略録』のよう してみれば、『要略録』は出典というよりもむしろ話のネタで とながら『要略録』の出典注記が施されるはずもない。玄棟に なわち漢字郎が中国の説話を語るということであり、当然のこ 二十三話に収められる先の恵生説話の枠組みは、「漢言」、す 枠内で改変を施していると考えられよう。 それに対して『三国 冒頭に記すように、「三寳感應録云」と出典注記をして、その 曼陀羅疏』という談義書においては、これらは巻三十七―1の 人の巡り物語という設定で集全体は規定されており、巻十一第 伝記』は、天竺の梵語坊、中国の漢字郎、本朝の和阿弥なる三 両書が共に書承を基としていることは確かであるが、『當麻

も一義的ではなく、説話が引かれる際の引用の論理を考慮するのレベルは必ずしも一様ではありえない。説話資料という意味同じ説話を引くという行為においても、その説話資料として

』金色′身",入""地獄'中" - 説法*或^爲"",餓鬼 - 説法~- 〈®

|云云) (9)如、此感應蓋多シ(10)定タ知メ所願不ワーサン虚タタ

矣(已上感應)

話集という場・枠組に求めてみたのである。 べきであろう。ここではその引用の論理の相違を、談

『當麻曼陀羅疏』巻二十―5

票日"像胸",放入光但于人"五六得人見",或人,夢"道如現", 中國陀文六金、色、像,一貧道之力三年""方"成。精動供養、 阿彌陀文六金、色、像,一貧道之力三年""方"成。精動供養、 阿彌陀文六金、色、像,一貧道之力三年""方"成。精動供養、 阿彌陀文六金、色、像,一貧道之力三年""方"成。精動供養、 度*、(°)、"佗"發願",爲、"」救"。。三途、衆生、受苦,一造"、 魔法王隨。喜欢師。之願, 一牒書也如即開*見之云。阿師爲、"」 成"九家。" 一段。一人冥官將、金紙、。金牒,一日。此、是閻 在"、於像前"一夢。?一人冥官將、金紙、。金牒,一日。此、是閻 在"、於像前"一夢。?一人冥官將、金紙、。金牒,一日。此、是閻 在"、於像前"一夢。?一人冥官將、金紙、。金牒,一日。此、是閻 在"、於像前"一夢。?一人冥官將、金紙、。金牒,一日。此、是閻 在"、於像前"一夢。。一人冥官將、金紙、。金牒,一日。此、是閻 在"、於像前",一一一人。一个一人。 "其像人、地獄", "其像人、地獄", 。 "其像人、地獄", 。 "其像人、地獄", 。 "其像人、地獄", 。 "其像人、地獄", 。 "其像人、地獄", 。 "其像人、地獄",

のメモを手元に置きながら『當麻曼陀羅疏』を執筆したことをものか、あるいは「三宝感応要略録云」のような出典注記つき一致しているといってよかろう。これは西誉が『要略録』その互の異同は10のみで、これも文意に関わるものではなく、全くこのうち巻四十八―5との異同、すなわち『當麻曼陀羅疏』相

巻四十六―2に梗概化して記される『要略録』説話をあげる3・4・5の箇所は全て『要略録』と一致しており、したがってきないから、酉誉が用いたものが『要略録』そのものか或いできないから、酉誉が用いたものが『要略録』とのものか或いできないから、酉誉が用いたものが『要略録』とのものか或いできないから、酉誉が用いたものが『要略録』とのものか或いできないから、酉誉が用いたものが『要略録』とのものか或いできないから、酉誉が用いたものが『要略録』と一致しており、したがっているが、一次ではならないであろう。

梗概化する際に用いられたのは、巻二十―5の二重傍線部であ化罪人" - 離苦得楽宛*如』生身、」(具如感應録上)(注12)震旦道如法師所造'三尺'木像'入』地獄' - 放レ光"説法シ*教』

と次のようになる。

いては記述に異同が見られる。その部分を『三国伝記』をもある。用語や言い回しは類似するが、道如が造った阿弥陀像につ

わせてあげると、

登二十一5 造,阿弥陀丈六,金色像『三国伝記』 造,阿弥陀丈六,金像《三宝感応要略録』 造阿弥陀丈六 金像

巻四十八—5 造 阿弥

卷四十六—2 所造 三尺木 像卷四十八—5 造阿弥陀丈六 金色像

には出典注記をしながらも、記憶に頼って綴ったらしいことが内容に異同をきたしていよう。どうやら酉誉は、梗概化する際内容に異同をきたしていよう。どうやら酉誉は、梗概化する際で大六」として引いたものを梗概化の際に「木像」とする経過は考えられるが、『要略録』の「金像」をその材質ではなく色として「金色、像」とし、さらに梗概化をその材質ではなく色として「金色、像」とし、さらに梗概化をその材質ではなく色として「金色、像」とし、さらに梗概化した巻四十六―1出典の『要略録』が「金像」とするのを、巻二十―5・巻四十出典の『要略録』が「金像」とするのを、巻二十―5・巻四十出典の『要略録』が「金像」とするのを、巻二十―5・巻四十出典の『要略録』が「金像」とするのを、巻二十―5・巻四十出典の『要略録』が「金像」とするのを、巻二十―5・巻四十出典の『要略録』が「金像」とするのを、巻二十―5・巻四十出典の『要略録』が「金像」とするのを、巻二十―5・巻四十出典の『要略録』が「金像」とするのを、巻二十―5・巻四十出典の『要略録』が「金像」とするのを、巻二十―5・巻四十出典の『要略録』が「金像」といる。

とでも假稱しうる、一つには説経・談義に必要な本縁・因果應凾第△巻」という形式の割注に着目し、それが「『大蔵経抜書』は『私寮百因縁集』や酉誉の著述の説話末尾に付される「○字典注記説話については、髙橋伸幸氏に興味深い報告がある。氏典注記説話の記述方法について確認してきたが、酉誉の出出典注記説話の記述方法について確認してきたが、酉誉の出

窺われる。

等に使用しうるエッセンス集的な抜書」の中ににおける所在を 行なったと考えておいてよいのではなかろうか。 義書説話の出典注記という枠組内で、酉誉目らが文飾・改変を から広く利用された説話資料であったことを思うと、玄棟が になるという保証はないものの、池上氏も説かれるように古く かしながら先の『要略録』の場合、文飾・改変が酉誉自身の手 うな抜書や類書が編まれ、利用される中にあったのである。し 系秩序立て、さらに分りやすく訓読抄出した国産の仏典類書! の言を借りるならば、「漢訳仏典をテーマ別に分類整理し、体 も明らかにしている(注14)。『金言類聚抄』は、小峯和明氏 とともに酉誉が引く本文が、『金言類聚抄』と一致することを 表すものであることを証し(注13)、「○字凾第△巻」の割注 報等の説話や、偈等を抜書したもの。また一つには註釋・講義 『三国伝記』という説話集を編む場合ほどではないにせよ、談 (注15)ということになるが、酉誉の著述環境もまた、このよ

四 談義書の場と説話

ことはできないであろうか。ひとつの説話を例に、その一面に たが、談義書という場における説話に何らかの特色を抽出する ついて考えることにする。 談義書における出典注記と説話の改変の問題についてみてき

> 前節にあげた高橋氏の報告の中に、次のような説話がある。 『當麻曼陀羅疏』巻十三

法苑聚林"云(間に一話省略)隋,大業中洛陽"有」人父喪き

汝一報をきず受り 母、寡;,一男一女了女嫁。*後"而母亡**二年'矣 「寒食'祭 頭面""血流"號泣告,女"我避"",汝兄" | 送",米五舛" | 與, 所" , 」放、驢而祭、是時妹在、兄弟 , 忽見、亡母、入,來、, , 墓乗、驢而往?"驢子、渡、水鞭"其頭面",血出。既"至"墓

゙」涙不」食,水草゙,兄妹跪請果ジ是母゙゙者願、爲゙゙、食゚゚・」草 見其兄既"還"如、先觀、、、驢頭面",血流,如、適、見、。、母,」 ↓驢身,| 償↓汝兄 | 五年矣今日水深シャ畏シム過タワトタ汝兄鞭、我 女"抱*大哭**以告,於兄"一言/由相符*兄弟慟哭**′,驢*亦垂 頭,破」面烈,償債,垂畢、何太(^;ペタ)非理;スット也言訖*不;

が見出せるが、少なくとも酉誉が『當麻曼陀羅疏』に引くに至 昔物語集』巻九第十七話、『三国伝記』巻六第十七話にも類話 であるのは高橋氏の指摘されたところである。この説話は『今 珠林』に拠っているのではなく、「書字凾第七巻」の引き写し 「法苑聚林『云」と出典注記をしながらも、酉誉が直接『法苑 ア驢即爲」食後死葬ス焉(書字凾第七巻)(注16)

という図式で説明できよう。割注として付されるものの、「書 法苑珠林―(抄出・改変)→書字凾第七巻―(書承)→當 麻曼陀羅疏

るまでの経路は、

ではなかろうか(注17)。 ではなかろうか(注17)。 ではなかろうか(注17)。 ではなかろうか(注17)。 ではなかろうか(注17)。 ではなかろうか(注17)。 ではなかろうか(注17)。 ではなかろうか(注17)。

同じく括弧で括って示すことにする。の『當麻曼陀羅疏』説話の冒頭をあげ、括弧に対応する箇所を一両話は校合し得ない程に異同があるものであり、ちなみに先

『厭穢欣浄集』上
畜生道

古、大唐、有俗候ケルカ、父"ヲクレテ、多年母*養*過古、大唐、有俗候ケルカ、父"ヲクレテ、多年母*養*過古、大唐、有俗候ケルカ、父"ヲクレテ、多年母*養*過古、大唐、有俗候ケルカ、父"ヲクレテ、多年母*養*過古、大唐、有俗候ケルカ、父"ヲクレテ、多年母*養*過古、大唐、有俗候ケルカ、父"ヲクレテ、多年母*養*過古、大唐、有俗候ケルカ、父"ヲクレテ、多年母*養*過古、大唐、有俗候ケルカ、父"ヲクレテ、多年母*養*過古、大唐、有俗候ケルカ、父"ヲクレテ、多年母*養*過古、大唐、有俗候ケルカ、父"ヲクレテ、多年母*養*過古、大唐、有俗候ケルカ、父"ヲクレテ、多年母*養*過

巻」を入手したという考え方もあるが、それが「大蔵経抜書」程前に成っているから、その間に説話資料として「書字画第七すると、『厭穢欣浄集』が『當麻曼陀羅疏』を遡ること十五年じ談義書という場に綴った説話なのである。両書の成立を考慮を云々する程度の異同ではない。これら二話は、同一人物が同を云々する程度の異同ではない。これら二話は、同一人物が同を云く対応する部分に傍線を施してみたが、もはや書承関係

,句読点、傍線は私に施した。)

はいかなることなのかの一面を、具体的に示しているといえよ『厭穢欣浄集』の説話は、説話を出典から離れて「物語る」といて柔軟に考える必要を迫っているように思われる。同一人物が出典に忠実に書承によって、またある時は自由な語り換えにが出典に忠実に書承によって、またある時は自由な語り換えにが出典に忠実に書承によって、またある時は自由な語り換えにいて柔軟に考える必要を迫っているように思われる。同一人物いて柔軟に考える必要を迫っているように思われる。同一人物いは談義書は認識されなければならない。

「求不得苦」の項に引かれる「訶梨底母経云」とする説話がを用いて綴られていることに気付くが、同じく『厭穢欣浄集』、『厭穢欣浄集』説話は、波線を施したように、全体が「候」

、馬、行方。不、知ウセテ候ケル。(以下略)

ν邊"マテ乗"来で、」品々νヨヲイノ物共取調で、塚"取置"隙

を著した五十六才に至るまで、そうした種類の資料を手元に置隆し、既に鎮西八代の正流を継いでいた酉誉が、『厭穢欣浄集』

のようなものであれば(注18)、二十代後半にして増上寺を興

>をあげ、「談義に際しての「取意」「和ケ」を予め内包した

・申言云、「願ふ多聞天王、大慈悲。垂言、我。哀タマへ。我、 鬼母申ケル、「五百人候。五百人'子-*′、何*イトヲシク 最愛/子愛兒"、夜叉神"盗"トラレテ、行方"不」知候。」

候へトモ、殊"此愛兒"申、末子""候ウへ、ミメヨク、其心 *常"カハリヌレハ、殊"最愛"*候。」

と地の文との文体に位相差を認めた語り方をしていることを考 ば、説草がそのままの形で談義書に引かれるというあまり知ら して、説草では、それらに代えて「候」を多用する点にあると えると、一旦口頭にのぼった可能性をも示唆しているのである。 と、訶梨底母の発話部分のみに「候」を用い、会話部分の文体 て口頭で語られる事を前提とした世界を経験しているのであれ されたものにあてはまる形を有しており、この説話が説草とし を端的に示すのは、『発心集』の語尾が多様な形を示すのに対 草「証玄律師事」の文末の傾向から、口頭詞章体としての特質 永井義憲氏が「発心集と説草」(注20)において紹介された説

るものから、仏典を和文化したもの、口頭にのぼったものまで、 さまざまなパターンがあるようである。 談義書に引かれてくる説話の「経歴」を考えると、書承によ れていない説話の経路を教えてくれることとなる。

写本の本文の比較から、その間に異伝が生じた理由のひとつに、 転写にいたる過程での底本の<解釈><(無意識の)読みかえ 牧野和夫氏は栄心『阿弥陀経見聞私』の万治刊本と近世初期

> ず、同一人物の説話利用の場合にも、文飾のレベルに止まらな の中に、すなわち「談義」という場の中に位置付けられるべき あろう。そしてその柔軟でしたたかな姿勢は、転写の際に限ら 題であろう。」と述べられている(注21)。たしかに、出典注 話の併存は、そうした姿勢のもとに繰り返し行われる説話行為 説話と、自由な語り換えによって綴る、いわば出典を失った説 ある。酉誉が談義書に引く、禁欲的に出典注記をしながら綴る い意識的な語り換えといった形をともなって発動されたようで 記説話の文飾・改変などは、このような視点から捉える必要が な書写の世界が豊かに存在したのではないか、一考に価する問 本の書写や「語り」本の転写には、こうした柔軟で、したたか 柔軟な転写の姿勢がうかがわれ」るとして、「中世の「談義」

注

ものであると考える。

(2)但し、近世最末期の文久元年刊行の版本『淨宗書籍目録』 えており、その発見はあながち期待できないものとも言えな に、「仏説観無量寿経」に続いて「同経要注記 (内題には「宇多氏蔵」とあり。)のイロハ順配列のクの項 西ヨ」と見

(1)「文学史研究」15 (昭49・7)

- れるが、確認できない。 曼陀羅疏』についても古写本発見の余地は充分にあると思わ(3)同時に、「古本在"縁山蔵中 - 」と記されており、『當麻
- 弥井書店)による。(4)『三国伝記』は池上洵一氏校注になる「中世の文学」〈三
- の受容」(『神戸大学文学部三十周年記念論集』所収 昭4(5)池上洵一氏は「中世説話文学における『三宝感応要略録』

のかなりの部分を和書に取材していることから、「玄棟の学・10)において、『三国伝記』の著者玄棟が、天竺震旦説話

- らせた最大の契機だったのではないかとさえ想像させるのでて三国の説話に対等の重みを持たせた説話集編纂へと踏み切の末の必然であって、結局この書と出会えたことが、彼をし力からすれば、『要略録』との出会いは偶然ではなく、選択
- (6)前掲(注5)論文。

ある。」と述べている。

- て―」(「国語国文」 昭22・9)。(1)「三国伝記と三宝感応要略録―三国伝記出典考の一部とし
- た上で、便宜上『大正新修大蔵経』の本文によることにする。(9)『三宝感応要略録』の引用は、善本ならざることを承知し(8)括弧内は版本においては二行の分かち書きになっている。

3

(11)前掲(注5)論文。(10)前掲(注4)の頭注。

紀要」第四号(通巻二十四号) 昭9・9)載される割注の一種について」(「札幌大学女子短期大学部載される割注の一種について」(「札幌大学女子短期大学部別)「『私聚百因縁集』『大経直談要註記』等の説話末尾に記

(12)括弧内は版本においては二行の分かち書きになっている。

- (15)「金言類聚抄について―仏典類書の成立―」(「仏教文学」四号(復刊第十一号) 昭50・4) (14)「『金言類聚抄』の本文を廻って」(「史料と研究」第十
- っている。(16)本文中(ゲメ゙タ)は読み仮名、末尾は二行の分かち書きにな

第六号 昭57・3)

めて論ずることにする。 西誉五六歳の作である。この書物についての詳細は、稿を改(ゴ)『厭穢欣浄集』は奥書によると、応永二十八年(一四二一)

59

- (18)前掲(注13)、高橋伸幸氏の論考による。
- り口で綴られている。(19)説話全体は出典とする『訶梨底母経』から離れた自由な語
- | 学図書館蔵本のなかから―」(「佛教文学」第十二号 | 昭63(江)「『阿弥陀経見聞私』・「西行房上(聖)人」―高野山大(辺)「説話文学研究」第十号(昭50・6)
- (ちかもと・けんすけ 本学大学院博士後期課程)